

はじめに

題名を見たとき、『火花』の間違いではないかと思ったが、『火花』だった。熱海の花火で始まり、熱海の花火で終わる作品なのに、なぜ題名が『火花』ではないのか。その素朴な疑問が、この一文を書こうとしたきっかけである。そして、読み進めていくと、この『火花』という題名こそ、作者の意図が込められていることに気づいた。以下、作者の意図を分析してみたい（本文引用は、又吉直樹『火花』（2015年3月、文藝春秋）に拠る。）。

一、『火花』という題名について

作品は、熱海の花火大会に呼ばれた「僕」が、花火の圧倒的な力と、プログラム進行の手違いで生じた惨事のために自暴自棄になっていた時に、長年の師匠となるべき神谷さんに出遭う場面から始まる。

作品中、「火花」という言葉出て来るのは、次の一か所だけである(傍線部筆者)。

沿道から夜空を見上げる人達の顔は、赤や青や緑など様々な色に光ったので、彼等を照らす本体が気になり、二度目の爆音が鳴った時、思わず後ろを振り返ると、幻のように鮮やかな花火が夜空一面に咲いて、残滓を煌めかせながら時間をかけて消えた。自然に沸き起こった歓声が終わるのを待たず、今度は巨大な柳のような花火が暗闇に垂れ、細かい無数の火花が捻じれながら夜を灯し海に落ちて行くと、一際大きな歓声が上がった。熱海は山が海を囲み、自然との距離が近い地形である。そこに人間が生み出した物の中では傑出した壮大さと美しさを持つ花火である(5頁10行～16行)。

ここでは、「火花」は、巨大な枝垂れ柳の花火の無数の枝を形作るその一部分の存在として登場しており、名前の通り、小さな火の塊に過ぎない。勿論、その一本一本の火花がなければ総体としての「花火」もあり得ないのであるが、人々は総体としての華やかな「花火」に関心があるのであって、それを構成する個々の「火花」に関心を持つ訳ではない。早い話、「火花」が一本消えてしまっても、誰も気が付かないだろうし、誰も何も感じないだろう。そうしたものが「火花」である。作者は、人々が仰ぎ見て、その壮大さ、美しさに感嘆の声を上げる「花火」を描きたかったのではなく、「花火」にとって総体としては必要不可欠でも、個別には意味を持たない、一本一本の「火花」のことを描きたかったのである。

当然のことながら、「火花」は、隠喩でもある。何の隠喩かと言えば、本作品では、僕や神谷さんの如き漫才師の一人一人が「火花」に譬えられていると思われる。すぐに消えてしまう「火花」もあれば、すぐに消えないで長く残る「火花」もある。そして、そのうち

に、「火花」の束となって、だんだんと人々に認識されていき、ほんの一握りであっても、大きな大輪の「花火」に成長する「火花」もある。「花火」になれば、人々に感動を与え、称賛される存在になれる。しかし、それは、ごくごくわずかで、多くの漫才師は、「火花」のままで消えていくのである。

考えてみれば、「僕」は「スパークスの徳永」と名乗っている（9頁5行目）が、このスパーク（spark）は、「放電現象などの際の火花」（『広辞苑』第6版）の意味で通常使われる言葉である（注1）。従って、語り手の漫才師「僕」の名前も「火花」を意味することは明らかである。神谷さんも「僕」も、どちらも、「火花」なのである。

結局、『火花』という本書の題名は、一瞬光ってもすぐに消えてしまう「火花」のように儚い漫才師としての、神谷さんと「僕」を描こうとした作品であると言えよう。

僕と神谷さんの出遭いの場面における熱海の「花火」、そして、作品最後で再び熱海での「花火」が登場する回帰的作品構造からすれば、題名は『花火』でもよいような気もするが、作者は、出会いのきっかけとしての「花火」を書こうとしたのではなく、華やかな「花火」と対照することで、「火花」の如き儚く消えてしまう漫才師の生涯を書こうと思ったのである。本書の題名が、『花火』ではなく『火花』である由縁である。

二、「伝記」の意味について

「お前大学出てないんやったら、記憶力も悪いやろうし、俺のことすぐに忘れるやろ。せやから、俺のことを近くで見てな、俺の言動を書き残して、俺の伝記を作って欲しいねん」

「伝記ですか？」

「そや、それが書けたら免許皆伝や」

伝記を作るとはどういうことだろう。先輩との付き合い方とはそういうものなのだろうか。（13頁2～8行）

ここには、唐突に「伝記」の話が出て来る。いかにも取って付けたようで不自然である。こうした初めて師弟関係を結んだ漫才師の二人が話す内容としても、あまりあり得そうではない印象を受けてしまう。

それでは、こうした印象を与えてしまうのは、作者のミスなのか。いや、そうではあるまい。

続けて次のような本文が見られる。

「お前は本を読むか？」

「あまり読まないです」

神谷さんは眼を見開き、そう答えた僕のTシャツのデザインを凝視してから、僕の顔に視線を移し、深く^{うなず}頷いて「読めよ」と言った。

（中略）

「僕の伝記を書くには、文章を書けんとあかんから本は読んだ方がいいな」

神谷さんは本気で僕に伝記を書かせようと思っているのかもしれない。

僕は本を積極的に読む習慣がなかったが、無性に読みたくなった。神谷さんは早くも僕に対して強い影響力を持っていた。この人に褒められたい、この人には嫌われたくない、そう思わせる何かがあった。

神谷さんは、コロッケを箸でつつきながら「俺は本好きなんやで」と嬉しそうに言った。

小学生の頃、図書の時間に他の同級生達が「動物図鑑」や「はだしのゲン」の取り合いをしている中、神谷さんは偉人と呼ばれる人達の人生が綴られた伝記を^{むきぼ}貪り読んでいたらしい。

「絵はな、表紙とな途中に少しだけやったんちゃうかな。あとは全部活字」

神谷さんは、活字が多い本だったことを強調したいようだった。

「新渡戸^{にとべ}稲造が何者か知ってるか？」

「五千円札の人ですよ？」

「そうや、あの人も色々やった人やねんで。そんなんも書いてたわ」

「そうなんですね。何をした人なんですか？」

「忘れたけど、読んだ時は感心したん覚えてるわ」

神谷さんはいかに伝記が面白いが熱弁を振るった。神谷さんの言葉によると偉人が成し遂げたことは文章上でも凄いとわかるのだが、その人となりは大概が阿呆であるらしく、自分の伝記があれば皆が驚くと幼き頃に思っただろう。(14頁4行～15ページ14行、途中一部略)

ここでは、神谷さんがなぜ伝記が好きで、なぜ僕に書かせようとしているかその種明かしがなされる。神谷さんは伝奇の面白さについて熱弁を振るうが、それは、「偉人が成し遂げたことは文章上でも凄いとわかるのだが、その人となりは大概が阿呆であるらしく、自分の伝記があれば皆が驚く」ということにあることが分かる。つまり、神谷氏さんは、自分を偉人だと自認しているのであり、その根拠は、「その人となりは大概が阿呆であるらしい」ということであつたと思われる。成し遂げたことが凄いかどうかはともかく、阿呆であることなら、自信があるということだろう。

結局、この「伝記」という視点は、この作品そのものと深く関わっていることがだんだんと明らかにされる。

「最近、忙しそうやけど、俺の伝記書いてるか？」という文面だった。

「もちろん書いてます」

「神谷 伝記」と書いたノートは十冊以上になっていた。最初は神谷さんにまつわることでしか綴っていなかったノートに、最近では漫才のネタや雑感までもが書き込まれ、もはや自分の日記のようにさえなっていた。(104頁3～7行)

此処に示されるように、僕が書いている神谷さんの伝記、それは、僕自身の日記の様相

も呈している。何と言うことは無い。この伝記こそが、この『火花』の作品そのもののものだ。入れ子型構造のように、この神谷さんを描いた作品では、作品の中に、神谷さんの伝記が入れ込まれ、二重構造となっているのだ。作品は、「僕」の師匠たる神谷さんの伝記そのもので、作品の中でも、なぜこの伝記的作品が書かれたか、どうやって成立したかが描かれているのだ。

「伝記」という一見この作品にそぐわない印象の言葉は、作品を読み進めるにあたって、その意図が明確になっていく。本書はまさに「火花」たる神谷さんの伝記なのだ。

三、再び、「火花」のこと

上述のように、題名の『火花』は、神谷さんや「僕」たち漫才師を象徴する言葉であった。ところで、「火花」が漫才師を象徴する言葉であるのは、そもそも何故なのか。「火花」が「花火」に対立するものであることは既に述べた。この字面をよくみると、「火花」は「花火」を逆さまにしたものであることに気づく。勿論、逆さ言葉としては、「ひばな」に対し「なばひ」であるが、これでは意味をなさない。漢字表記を通した逆さ言葉としては「火花」の逆はまさに「花火」である。「火花」は「花火」のアナグラムと見ることもできるが、素直に逆さ言葉とみておきたい。仮に漫才のネタとするなら、「火花」の逆を「花火」とするのは十分にあり得る表現であろう。漫才は一般的に逆さ言葉を多用する。これはオール阪神・巨人等漫才師の頂点に立つと思われるコンビから、成り立ての未熟な漫才師まですべて例外でない。

作品でも、あちこちに出て来るが、なかでも「僕」と相方が作っている漫才コンビであるスパークスが解散する場面は印象的である。

僕が口上として、「世界の常識を^{くつがえ}覆すような漫才をやるために、この道に入りました。僕達が覆せたのは、努力は必ず報われる、という素敵な言葉だけです」と言うと、「あかんがな！」と相方が全力で突っ込み、笑いが起こった。

「感傷に流され過ぎて、思ってることを上手く伝えられへん時ってあるやん？」

「おう」

「だから、あえてな反対のことを言うと宣言した上で、思っていることと逆のことを全力で言うと、明確に想いが伝わるんちゃうかなと思うねん」

「お前は、最後まで、何をややこしいこと言うとなねん」

「まあ、やったらわかるわ。行くぞ」

「おう」

「おい、相方！」

「なんや？」

「お前は、ほんまに漫才が上手いな！」

「おう、いや喜びかけたけど、これ思ってることと反対のこと言うてんねんな」

「一切嚙まへんし、顔も声もいいし、実家も金持ちやし、最高やな！」

「腹立つわこいつ」

「天才！天才！」

「ど突き回したるか！」

山下が大声を張り上げると、一際大きな笑い声が劇場に響いた（123頁4行～124頁5行）。

ここで言う逆さ言葉は、「最高」に対する「最低」と言った意味的に明確に対立する言葉である。しかし、実際には逆さ言葉は意味だけに限定されるものではなく、かなり融通がきくものである。「花火」と「火花」を比べてみても、単に漢字の順番が異なっているだけでなく、意味的にも、花火は「夜空に咲いた大輪の花をイメージした火による壮大な芸術」であり、「火花」は、「小さな火の断片が空中に放出されたものが一辺の花びらのごとく見えるもの」であろう。どちらも、「火」を「花」に譬えたものであるが、その大きさが異なるのである。また、前述の如く、「火花」が集まって「花火」となるのであって、「火花」は「花火」の極小の構成要素でもある。ちなみに「花火」の中で最小のものが線香花火で、それこそ、「火花」自体を小さな芸術品に仕立てたものである（注2）。普通の花火は、色も形も大きさも、遥かに多くの「火花」の集合体であり、それを人々は愛でるのである。本書においても、「火花」と「花火」が対立するものとして、実に巧みに描かれている。さらに、「スパークス」という漫才コンビの名称が「火花」の意味であることは既述したが、なぜ火花を意味する「スパークス」という名にしたかと言えば、漫才がボケと突っ込みの2人でまさに「火花」を散らす職業だからでないか。神谷さんと「僕」の会話も、こんな会話が常に繰り返されたら疲れるだろうなというくらい「火花」を散らしている。例えば、次の一連の会話である。

「龍よ目覚めよ！太鼓の音で！」という部分が際立って阿呆であったことと、語呂も悪かったことを僕が指摘すると、神谷さんは「龍というのは本来、えげつないくらい格好良過ぎるものやからな。過ぎる、のがいいんやろな。大き過ぎるのも面白いもんな。なんでも過度がいいねん。やり過ぎて大人に怒られなあかんねん」と語り、満足気に珈琲を啜った。

「大人に怒られなあかんねん、という表現も、もはや月並み過ぎな不良ですもんね」

神谷さんの前だと、なぜか僕は自分の思いを正直に話せた。神谷さんは少し考え込む表情になった。（中略）

「正直、そこは難しいとこやな。月並みであっても格好良さの純度を保つもんもあるもんな」

「どういうことですか？」

「大人に怒られなあかん、って確かにどこかで聞いたことあんねん。でもな、聞いたことあるから、自分は知ってるからという理由だけで、その考え方を平凡なものとして否定するのってどうなんやろな？これは、あくまで否定されるのが嫌ということで

はなくて、自分がそういう物差しで生きていっていいのかどうかという話やねんけどな」

僕が知っている限り、神谷さんの作る漫才は誰もが知っている言葉を用いて、想像もつかないような破壊を实践するものだから、この話は神谷さんの根幹を示すものなのかもしれない。

「平凡かどうかだけで判断すると、非凡アピール大会になり下がってしまわへんか？ほんで、反対に新しいものを端^{はな}から否定すると、技術アピール大会になり下がってしまわへんか。ほんで両方を上手く混ぜてるものだけをよしとするとバランス大会になり下がってしまわへんか？」

「確かにそうやと思います」僕は率直に同意した。

「一つだけの基準をもって何かを測ろうとすると眼がくらんでまうねん。たとえば、共感至上主義の奴達って気持ち悪いやん？共感って確かに心地いいねんけど、共感の部分^いが最も目立つもので、飛び抜けて面白いものって皆無やもん。阿呆でもわかるから、依存しやすい強い感覚ではあるんやけど、創作に携わる人間はどこかで卒業せなあかんやろ。他のもの一切見えへんようになるからな。これは自分に対する戒^{いまし}めやねんけどな」と一語一語噛みしめるように言った。

「何かを批評するのって難しいですよ」（31頁3行～32頁最終行）

ここでは、月並みな表現か新しい表現かについて、一種の哲学的ともいえる白熱した議論を、神谷さんと僕が展開している。まさに、火花を散らしているのだ。

もう一例挙げよう。

「お前の一番好きな食べ物なんや？ って聞いとんねん」

「鍋です」

そう僕が答えると、神谷さんは黙りこんでしまった。神谷さんの沈黙の奥から、大勢の笑い声が響いている。

「な、鍋？」

ようやく、神谷さんが言葉を発した。

「はい、鍋です」

「あんた鍋食べんの？」

「いや、よう一緒に食べてますやん」

「えらい丈夫な歯しとんねやな」

「いや、違いますやん」

「僕は歯が弱いからあかんけど、鉄の鍋と土鍋とどっちがいいの？」

「何を言うてますの」

神谷さんが急に馬鹿になってしまった。

「どちらが、齧^{かじ}りやすいの？」

「いや、鍋って、鍋そのものは食べないんですよ」

「お前、鍋食うって言うたやないか？」

「言いましたけど、鍋の中身を食べるんですよ」

「鍋の実かいな？」

「そうです」

「鍋の実？ 鍋の、どこ剥いたら実が出てくるの？」

「果物みたいに言わんといってください。だから、水炊きとか、キムチ鍋とか、散々一緒にやってるでしょ」

「つまり、鍋料理のこと言うてんの？」

「そうですよ。なんで急に阿呆になったんですか？ しつこくて、ちょっと怖かったですよ」

「ほな、牛の牛肉買っとくわ」

「牛肉は牛です。阿呆やな」（５７頁７行～５８頁最終行）

こちらは、そのままで漫才の掛け合いとも言えるやり取りが綴られている。スピードの速さから言えば、こちらの方がより「火花を散らす」という状態を彷彿とさせるかも知れない。

いずれにせよ、漫才の世界は、まさに、ボケと突っ込みが火花を散らす世界であり、作者が本作品の題名を『火花』にしたのは、まさにその言葉が、漫才師の世界を端的に表わしているからだと理解されるのである。

四、結び・・・舞台等について

この作品が、熱海に始まり、熱海に終わる循環的な描写をしていることは先に論じた。「僕」が神谷さんに出遭うのは熱海の花火大会で、最後に神谷さんを元気づけるために一緒に訪れるのも、熱海の花火大会である。映画等でよくある描写ではあるが、出会いの場面では、「僕」が神谷さんに弟子入りし、明らかに神谷さんが優位にある。ところが、最後の場面では、破産し、漫才師としても失敗し、絶望的な状況にある神谷さんに対して、「僕」は、漫才師として成功し、脚光を浴びた後に、コンビを解消し、フリーになる。経済的にも明らかに「僕」の方が上位にあり、神谷さんの旅行代も、すべて、「僕」が肩代わりするのである。「師匠」であるのは名前だけになっても、「僕」は礼を失しない。あくまで「師匠」として遇そうと思っている。神谷さんも、そうした「僕」にすっかり甘えて遠慮しない。最初二人が出会った時、飲み代は神谷さんが払った。今では、立ち場が全く逆転している。

この小説は、その意味で、出会いと末尾が対照的、且つ対称的に描かれ、極めて均整が取れた作品に仕上がっている。

もう一つ、大阪と東京という江戸時代以降、経済や文化で競争を繰り返してきた日本の二大中心地が隠れた舞台ともなっている。大阪の漫才師が東京で旗を挙げようとして、「僕」

は成功するが、神谷さんは失敗するという話でもある。言葉を見ても、「僕」が必ずしも大阪弁でないのに、神谷さんは終始大阪弁を発している。東京で受け入れられようとするなら、東京弁に合わせることも必要かもしれないが、それをしない、あるいはそれが出来ない神谷さんは、東京で受け入れられることは無かった。同じ大阪の漫才師でありながら、生き方に大きな違いが出たのだ。

後半で、神谷さんは、オリジナルをうりにしていたのに、「僕」の真似をして、髪を銀に染める。それは、「僕」の不評を買う。また、さらに本来のオリジナルな生き方に戻り、他の漫才師と差別化するため、豊胸手術を行うという思いがけない行動に出る。

今までは、頭で考え、言葉として生み出し、そのことで「火花」を散らしていた神谷さんは、なかなか成功しない人生にいらだち、まずは、服装で変身しようとし、服装での変化を否定された挙句、自分の肉体を変化させることで、新たな人生を切り拓こうとしたのだ。しかし、その思いつきも「僕」から散々に非難されてしまう。

そうした傷心の神谷さんを慰めるために、「僕」は、神谷さんとの出会いの場である熱海へと再び神谷さんを誘う。神谷さんは、素人芸能大会で優勝すれば一〇万円もらえるという機会を知り、再び、一からやり直そうとするのであった。

独特な能力を持ちながら、それがあまりに既成概念を破壊してしまうがために受け入れられない一人の漫才師の生涯、それは、「僕」自身の反面教師でもあるのだが、そうした神谷さんという造形を描きだし、漫才師として生きていくことの厳しさ、人生の意味を問うた作品であると言えよう。

注

- (1) 他に、岩波国語辞典第七版では「スパーク（名・ス自）放電などのとき火花が飛ぶこと。その火花 **spark**」、小学館大辞泉第二版でも「スパーク **spark**（名）スル①放電などによって火花が出ること。「パンタグラフが一する」とあって、英語に由来する外来語であるが、日本語として定着している。
- (2) 線香花火については、中谷宇吉郎「線香花火」が、やはり、その火花に注目して、松葉の構造や、和紙でなくては造れない微妙な魅力を語っている。（『中谷宇吉郎随筆選集』第一巻 朝日新聞社 1966（昭和 41）年 6 月）